ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2401A

社会連携系職員養成プログラムレベルⅠ
地域特性論−地域課題の抽出と住民による解決に向けての合意形成づくり−

■講師

前田　眞（愛媛大学　社会連携推進機構　教授　地域連携コーディネーター）
昭和52年3月広島工業大学工学部建築学科卒、平成4年7月邑都計画研究所設立、平成17年特定非営利活動法人まちづくり支援えひめ設立、それぞれの代表を務め、平成27年1月より愛媛大学社会連携推進機構にて地域連携コーディネーター就任。起業してから24年間にわたって地域活動や市民活動の社会的起業支援を実施してきて、まちづくり松山、お城下松山（松山市）、まちづくり郡中（伊予市）、川津南やっちっみる会（西予市）、シクロツーリズムしまなみ（今治市）等のまちづくり組織の設立に参画。

■プログラム概要

急速な人口減少、超高齢社会、少子社会、商店街に象徴される商業の衰退、地場産業の衰退など、地方は大きな転換点にさしかかっています。それらを打開するために、「地方創生」が叫ばれています。この地方創生の実現に向けては、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な地域づくりが求められます。

大学においては、地域における課題解決への対応とそれに資する人材の育成が求められています。今回の講義では、地域課題の把握、解決に向けてのノウハウ取得と解決に向けた担い手づくりとして、地域住民をエンパワーメントしながら、多様な団体を巻き込んだ協働型事業の構築、合意形成に向けたマルチステークホルダープロセスの手法について、グループワークによる模擬的な演習を通して学びます。

この研修では、参加者の皆さんが日常的に経験している事例やそこに見られる工夫等もお互いに共有していきたいと考えています。

■主な受講対象

・地域の課題抽出や課題解決に向けて地域住民をエンパワーメントすることに係わった経験の少ない教員の方を歓迎します。
・地域創生センター等の地域との連携事業に携わっている教職員。
・地域の課題解決や活性化に向けて活動に興味のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 地域の課題について説明できる。
2. 地域の強みや弱みについて説明できる。
3. 地域の課題解決に向けた一つのエンパワーメント手法についてわかる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

※本プログラムは，「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」と連携し，愛媛大学，香川大学，四国大学，今治明徳短期大学による共同プログラムとして開講いたします。

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

プログラム番号　2401B

大学の危機管理−事例から考えるハラスメント−

■講師

吉田　一惠（愛媛大学　教育学生支援部　部長）
愛媛大学法文学部法学科卒業。愛媛大学広報室長、人事課長を経て平成 26 年 4 月から現職。広報室・人事課での5年6月の間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、労務・人権侵害事案にも対応。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD−SDC として引き続き職員の能力開発に取り組んでいる。

倉田　千春（愛媛大学　教育学部　事務課　副課長）
愛媛大学教育学部卒業。愛媛大学採用後は、学生部、医学部、理学部等で主に総務系業務及び労務管理事務に携わる。平成 25 年 4 月から平成 28 年 3 月までハラスメント防止対策チームリーダーとして、相談窓口や裁判対応に係る業務を担当。

■プログラム概要

あなたが、今、何気なく行っているその言動は、ハラスメントではありませんか？

本プログラムでは、大学等において、今、身近にあるハラスメントについて説明すると共に、ハラスメントが起こった時の初期対応、未然に防ぐための気づきについて考えます。特に、複雑かつ多様化するハラスメントについて、具体的事例を挙げながら、「ケースメソッド」により省察し、①ハラスメント認定のポイント、②ハラスメントが起きた場合の対処方法、③ハラスメント「施策」を導き出していきます。

■主な受講対象

全教職員

■本プログラムの到達目標

1. ハラスメントについて，説明することができる。
2. ハラスメントの事実認定ができる。
3. ハラスメントに対処できる。
4. ハラスメントの予防対策を構築することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2401C

大学職員の基礎力を考える

■講師

丸山　智子（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　特任助教）
東京学芸大学教育学部教員養成課程卒業。Columbia University Teachers College, International Educational Development MA 修了。芝浦工業大学にて博士(学術)取得。専門は、教育開発、プロジェクトマネジメント、リーダーシップ。2013 年 10 月より現職。教職員の能力開発に従事し、特に SD(staff development)のプログラム開発、及び研修の運営・実施・評価などを中心に担当。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

大学を取り巻く環境の変化に伴い、大学職員に求められる能力とその開発を巡り活発に議論が行なわれています。求められる能力に関しては、新聞、学術書、論文など多くの媒体で論じられ、また、大学独自に職員の能力開発を目的とした研修の実施も進んでいます。

本研修では、職員が大学で働く上で所属部署を問わず必要となる「基礎力」に焦点をあてます。これまで、職員に求められる「基礎力」として様々な能力が列挙されてきましたが、その力を実際の仕事の中で活用できるようにするためにはどうすればよいのでしょうか。そのためには、知識習得にとどまらず、その能力が職場のどのような場面で必要とされているのか、イメージできることが必要です。実際に職場で起こりうるケースをもとに、その対応のためにどんな「基礎力」を、具体的にどう使うことができるかを考え、実践への応用力を身につけます。

■主な受講対象

大学職員に求められる「基礎力」の実践に関心がある、あるいは現在職員の能力開発に携わっているか、今後その予定がある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 大学職員に求められる「基礎力」とはどのような能力かを説明できる。
2. 自分の経験に基づいて、職場における「基礎力」の具体的な活用場面を列挙することができる。
3. 実際の仕事の中で「基礎力」を活用することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

プログラム番号　2401D

大学組織を理解する

■講師

中井　俊樹（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　教授）
専門は大学教育論、人材育成論。1998 年に名古屋大学高等教育研究センター助手、2007 年に准教授、2015 年より現職。著書に、『大学の FD Q&A』（共編著）、『アクティブラーニング』（編著）、『看護のための教育学』（共編著）、『看護現場で使える教育学の理論と技法』（編著）、『大学の IR Q&A』（共編著）、『大学の教務 Q&A』（共編著）、『大学教員のための教室英語表現 300』（編著）、『大学教員準備講座』（共著）、『成長するティップス先生』（共著）などがある。

宮林　常崇（公立大学法人首都大学東京　教務課教務係長）
修士（経済学）、民間企業を経て、平成 22 年 4 月公立大学法人首都大学東京へ入職、自己点検・評価、DP・CP 策定、全学共通教育の再体系化、国際副専攻プログラムの立ち上げ等に従事し、平成 26 年 4 月から現職。平成 28 年 6 月から、公立大学協会第3委員会「教職員の資質向上に関するワーキンググループ」委員を務める。著書に、『大学の教員免許業務』（分担執筆）がある。

■プログラム概要

大学という組織は、大学以外の組織と異なるとよく言われます。大学組織は他の組織とどのような点で異なるのでしょうか。限られた資源の中で新たな取り組みをスタートさせるためには、トップの強力なリーダーシップ以外にどのような手段が有効になるのでしょうか。

本セッションでは、大学という組織がどのような論理で動いているのかについて深く理解する機会をつくります。大学教員、大学職員、大学組織の論理を理解した上で、実際の組織運営に応用する力を身につけます。つまり、大学組織を客観的に理解することで、組織の力をどのように引き出し、活かせばよいかについて考えるきっかけとします。

■主な受講対象

教職員。大学組織は他の組織とどのような点で異なるのか、個々の教職員はどのような力によって動いているのか、大学の構成員はどのような組織風土を大切にしているのか、大学では誰が実質的に意思決定しているのか、大学ではどのようなリーダーシップが有効なのかなどの疑問を持っている方を歓迎いたします。

■本プログラムの到達目標

1. 大学教員および大学職員の特徴を理解し、自分の言葉でまとめることができる。
2. 大学の組織的特徴を理解し、自分の言葉でまとめることができる。
3. 大学組織の論理を理解し活用できる枠組みを身につけることができる。
4. 大学教員および大学職員の思考を理解し、組織運営に活用することができる。
5. 大学組織に関する多様な考え方や経験で培った事例を尊重し、共に学びあう雰囲気に貢献することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，講義中心

New!!

プログラム番号　2401E

大学における障害学生支援とは？-障害者差別解消法と合理的配慮-

■講師

坂井　聡（香川大学　教育学部　教授、バリアフリー支援室　室長）
昭和 60 年香川大学卒業。香川県内の特別支援学校教諭。平成 15 年金沢大学大学院教育学研究科修了。平成 17 年より香川大学助教授准教授を経て平成 23 年より教授。平成 27 年 5 月より香川大学バリアフリー支援室　室長。障害者への ICT 利活用で IAUD アワードで金賞受賞。

■プログラム概要

平成 28 年 4 月より障害者差別解消法が施行され、公的機関においては障害のある人への合理的配慮が義務となりました。これにより、多くの大学がその対応に追われている現実があるのではないかと思います。合理的配慮は、当事者が社会的障壁を感じた際に、その社会的障壁を取り除こうとするものです。つまり、障害は本人の個人因子と、環境因子との相互作用によって生じるものであり、環境を整えることにより社会的な障壁を取り除くことができれば、当事者の困難さが軽減されるという考え方に基づいているものと考えることができます。ここで考えられるのが、当事者が自分に必要な支援を表明することができる環境づくりです。支援を受けながらでも自己実現することが、人生にとってプラスになるという考え方を持つことができるように、大学全体の環境を整えていくことが重要になってきます。そのためにどのようなことを考えていけばよいのか、ここでは具体的な取り組みも紹介し、障害のある学生の支援に役立つヒントを共有したいと考えています。

■主な受講対象

障害のある学生への支援に関心がある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 合理的配慮の考え方について説明できる。
2. 障害者差別解消法の施行に対する大学の対応を知り、学生への支援を考えることができる。
3. 大学の環境をバリアフリーの観点から見直すことができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2401F

アイスブレイクの技法

■講師

加地　真弥（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　特定研究員）
島根大学大学院教育内容開発専攻修了（教育学）。島根大学教育開発センター、民間企業、島根県の公立高校常勤講師を経て、2014 年 6 月より現職。初年次教育「新入生セミナー」「スタディ・スキル講座」や「TA・SA 研修会」を担当。学内の「教職員研修」「新任教員研修」におけるアイスブレイクなども担当。

■プログラム概要

初回の授業でどのような工夫をされていますか。学生も教員も緊張して、何となくぎこちない雰囲気になってしまった経験はありませんか。お互いの緊張をほぐし、授業に参加しやすい雰囲気をつくる手法としてアイスブレイクがあります。学生同士の距離を縮め、話し合いなどの共同作業をスムーズに行えるよう環境をつくります。また、初回の授業以外でも、授業の途中で雰囲気を変えるためにアイスブレイクを導入することも有効です。

このプログラムでは、授業で使えるアイスブレイクの技法を実際に体験いただきます。アイスブレイクがもつ様々な働きを踏まえながら、どのような効果を期待して授業に導入するのか考えていきます。さらに、アイスブレイクを実践するにあたっての悩みや実践例を共有し、授業に役立つアイスブレイクを持ち帰っていただきます。

■主な受講対象

アイスブレイクの導入に関心のある教員。実際に授業で導入されている／導入してみたいと考えている教員。

■本プログラムの到達目標

1. アイスブレイクを導入する効果を説明できる。
2. アイスブレイクの手法を知り、担当する授業で活用できる手法を選択できる。
3. 参加者同士でアイスブレイクの実践例を共有し、実践へのヒントを得ることができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

プログラム番号　2402A

理工系講義形式授業において学生の学習を促進する授業デザイン

■講師

榊原　暢久（芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター／工学部 教授）
北海道教育大学（札幌校）小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士（理学）。 旭川工業高等専門学校助手・助教授、茨城大学工学部講師を経て、2007 年度より芝浦工業大学工学部准教授。2009 年 4 月より現職。ファカルティ・ディベロッパー。
日本高等教育開発協会、大学教育学会、日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発（特に、理工系数学基礎教育や教員支援（FD）プログラム）。

吉田　博（徳島大学 総合教育センター　講師）
愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009 年度から徳島大学で全学 FD プログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）の FD 担当として、SPOD-FD プログラムの企画立案、調査研究に携わる。
日本高等教育開発協会、大学教育学会、初年次教育学会等所属。

■プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは、各学科の必須科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は、大人数、講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムでは、このような理工系基礎科目における講義形式授業の中で、学生の主体的な学びや授業外学習を促進することに繋がるひと工夫を取り扱います。はじめに、授業で学生に達成してほしい到達目標を設定し、その目標到達を測定する評価方法について考えます。続いて、具体的な授業の方法や課題について考えていきます。プログラムは、実際に取り組まれているより身近な実践事例を紹介し、講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。参加者のみなさんがアイデアを持ち寄ることで、自身の授業における課題解決のヒントや、今後の新しい実践のヒントが見つかることを期待しています。

■準備物や事前課題

参加者が担当する講義科目のシラバス1つ（講義を担当されていない教職員の方は、自校で実施している理工系講義科目のシラバス1つ）を持参のこと。

■主な受講対象

・自身の理工系の講義形式授業の中で実施できる、広い意味でのアクティブラーニングの手法を知りたい教員。
・自身の理工系の講義形式授業の中で行っているアクティブラーニングの取り組みを他の教員と共有し、改善のヒントを得たい教員。
・自身の理工系の講義形式授業を振り返り、基礎的な再構成の方法を知りたい教員。

■本プログラムの到達目標

1. 理工系基礎科目における講義形式授業の基礎的なデザイン方法を修得することができる。
2. 理工系基礎科目における自身の講義形式授業をふり返り、成果や課題、改善すべき点を明らかにすることができる。
3. 理工系基礎科目における講義形式授業の取り組みについて他者と話し合うことで、自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

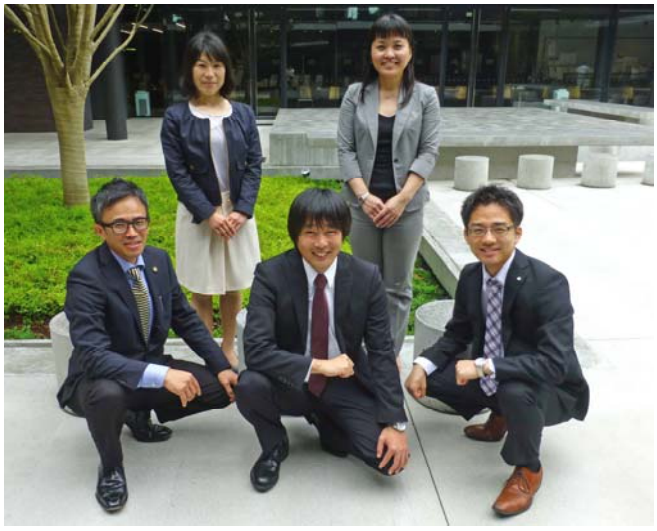
ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2402B

始めよう、仕事の整理と協働

■講師



≪SPOD次世代リーダー養成ゼミナール6期生≫

愛媛大学	医学部学務課教務チーム	チームリーダー	中塚　俊郎
香川大学	工学部会計係	主任	塩田　英孝
徳島大学	総務部人事課常三島職員係	係長	大森　理佐
高知大学	総務部人事課人事管理係	主任	下元　浩二
松山大学	経営企画部経営企画課	係長	中村　詩乃

■プログラム概要

私達大学職員は、日々の業務を数多くこなしていくことで成長します。また、数をこなすだけでなく、学内外の様々な人達と関わり、様々な業務を通じて大学に貢献することが期待されています。今後、質・量ともに増えていく業務に埋没することがないよう、業務の進め方そのものについて考えてみませんか。

本プログラムの前半では、業務に取りかかる際に行う仕事の整理手法を紹介します。自分が担当する業務を細かく洗い出し、それらをどのような順序で構成すれば効率的に取り組むことができるのか検討します。

後半では、職場でのコミュニケーションを通じて上司や同僚と情報共有することの重要性を学び、組織の一員として協力して働くことへの理解を深めていきます。

全体を通して、皆さんが大学から期待される職員像を目指してステップアップするためのお手伝いをいたします。

■主な受講対象

採用後2年以上30歳未満の若手職員。

■本プログラムの到達目標

1. 自分の担当業務に、優先順位をつけることができる。
2. コミュニケーションスキルを用いて、情報を共有することができる。
3. 大学職員として、協力して働くことの重要性を説明することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）13：00～17：30

会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2402C

経験から学ぶ力を育てる

■講師

塩崎　俊彦（高知大学　大学教育創造センター　教授）
昭和 62 年 3 月、上智大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専攻、日本文学。2007 年より高知大学大学教育創造センターで、FD研修プログラムの作成・実施や授業支援に取り組む。総合科学系地域協働教育学部門教授。

■プログラム概要

学生の自発的な学びを促すためにアクティブ・ラーニングを導入した大学の授業が注目されています。インターンシップ等の学外での学びの機会も増えてきました。あるいは、スタッフ・ポートフォリオなどで自らの業務を振り返りながら、今後の改善に繋げていく試みも見られるようになってきています。これらに共通しているのは、いずれも経験から得られた気づきをもとに次のアクションを起こす、という考え方です。

この研修では、グループワークとその振り返り通じて、経験のプロセスを見ることと、気づきを得るための振り返りについて、体験を通じてどのようなことかを理解していただくことをめざしています。

研修の多くの時間がグループワークに充てられますが、はじめての方も歓迎します。

1．　アイスブレイク
2．　グループワーク：30分程度の課題達成型のグループワークを行います。
3．　グループワークの振り返り
4．　ミニ講義：「経験、プロセス、振り返り」

■主な受講対象

・授業にアクティブ・ラーニングの要素を導入している／しようと思っている教員。
・振り返りを職場の業務に活かしている／活かしてみたいと思っている職員。
・インターンシップなど課外の取組を学生の成長に活かしたいと思っている教職員。
※2時間の研修のほとんどがグループワークとなりますので、あらかじめご了承ください。

■本プログラムの到達目標

1．アクティブ・ラーニングの二類型が説明できる。
2．グループワークを通じて気づいたことを他者に説明できる。
3．経験から学ぶためのポイントを説明できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

プログラム番号　2402D

反転授業をやってみよう

■講師

金西　計英（徳島大学　大学院総合科学研究部、総合教育センター
ICT活用教育部門、大学開放実践センター　教授）
徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000 年、博士（工学）を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999 年より徳島大学へ。2009 年より徳島大学大学開放実践センター教授。大学における e-Learning の開発、および運用の研究に取り組む。また、高等教育における ICT 活用の授業開発について、実践という観点から取り組む。

■プログラム概要

最近、学習効果の点から、ブレンド型eラーニングの一種である反転授業に注目が集まっています。反転授業は、完全習得型と授業中に学生との討論等をおこなう高次型に分類されます。高次型の反転授業は、学習者を深い理解へ導くことを目指しています。この高次型の反転授業をおこなう場合、「橋本メソッド」を用いておこなうことができます。そこで、本プログラムはワークショップ形式で、反転授業での「橋本メソッド」を、体験を通し学ぶことを目指します。まずは、反転授業と「橋本メソッド」についての理解から始め、簡易な形で「橋本メソッド」を体験してもらう予定です。具体的な授業の手法を体験することで、自らの授業で反転授業を実施する場合、いろいろな形態へ方式をアレンジすることが容易になると思います。なお、「橋本メソッド」とは富山大学の橋本勝先生の開発した大人数向けのアクティブラーニングのことです。

1. 反転授業と橋本メソッドの紹介（ここは講義式）
2. グループを作ろう
3. グループで作業してみよう
4. グループで発表しよう
5. 作業の振り返り

■主な受講対象

アクティブラーニングを授業の中で実施してみたいけれど、踏み出せないでいる教員の方を歓迎します（アクティブラーニングの一種を、実際にワークショップの中で経験してみますので、どんなものか体験することで理解が深まると思います）。教務系の職員の方も、アクティブラーニングを実際に体験してみたいという方は歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 反転授業について授業の構成方法等について説明できる。
2. 橋本メソッドについての授業手法等について説明できる。
3. 反転授業を橋本メソッドと組み合わせて実施する手順を説明できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，講義中心

New!!

プログラム番号　2402E

教育・学修支援を担う図書館員の能力開発−求められる知識・スキルを再考する−

■講師

井上　真琴（同志社大学　学習支援・教育開発センター　事務長）
同志社大学職員として教務事務、システム開発、図書館、大学企画業務に従事。図書館ではレファレンス・サービス・選書業務、企画部門では高等教育政策調査およびラーニング・コモンズの設計・運営に携わる。学生の情報リテラシー向上を図るため，ちくま新書『図書館に訊け！』（2006 年度私立大学図書館協会賞）を刊行し，同大学社会学部嘱託講師（科目：学術情報利用教育論）を務める。

■プログラム概要

「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」（2010.12.3）では、図書館機能として「学習支援及び教育活動への直接の関与」が、図書館員の資質・能力として「学習支援における専門性」「教育への関与における専門性」が謳われました。しかし、学習者中心の教育への転換と学習成果主義への移行が図られるなか、いったい大学図書館員は何をどのように教育・学修支援を行うべきなのでしょうか。実践にはどのような知識・スキルの開発が必要なのでしょうか。

本研修は講義中心ではありますが、教育・学修支援専門職の養成や SD 義務化の動きに留意しつつ、大学図書館員の能力開発について参加者と意見交換や課題の共有を行います。内容は、情報リテラシー教育における「情報探索のスキル指導」から「情報を使って学習成果を出す指導」への移行、ラーニング・コモンズ設置等の学習環境整備の意味、といった話題・事例が中心となります。

■準備物や事前課題

1．以下の資料の事前読解
　・井上真琴．“大学図書館の学習支援：平成 26 年度大学図書館職員長期研修講義資料”．筑波大学附属図書館．2014-07-08．https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/choken/2014/17.pdf,（参照 2016-05-17）.
2．下記はいずれかを読解
　・今井むつみ．学びとはなにか：〈探求人〉になるために．岩波書店, 2016, 230p.
　・今井むつみ，野島久雄．“第5章　概念の学習”，“第8章　社会的文脈に埋め込まれた学習”．人が学ぶということ：認知学習論からの視点．北樹出版, 2003, 247p.

■主な受講対象

大学図書館における教育・学修支援の実践に関心のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1．なぜ大学図書館が教育・学修支援を担うのか、その根拠を理解できる。
2．何をどのように教育・学修支援をすればよいのか、具体的に説明できる。
3．教育・学修支援に求められる知識・スキルについて、事例を挙げて説明できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2402F

質問を変えると授業が変わる？！！

■講師

川野 卓二（徳島大学　総合教育センター　教授）
1982 年、大阪教育大学　大学院教育研究科修了（教育心理学、M.Ed.）。1988 年、ユタ大学　大学院教育心理学研究科修了（学校心理学、Ph.D.;統計学、M.Stat.）。1997 年より徳島大学　大学開放実践センター勤務。2014 年 4 月より総合教育センターへ異動。大学では 2004 年より全学FDを担当。

■プログラム概要

双方向の授業を行うことが求められていますが、なぜ私たちは、講義の際に質疑応答の時間を十分に割くことを躊躇するのでしょうか？この研修では、学生のより深い学びを起こさせるために授業で利用できる質問技法について理解を深めましょう。

当日は、日頃、自分の授業で使っている質問を持ち寄り、それらを分類し、それぞれの効果について考えます。また、より深い学びにつながるように質問を書き直すグループワークの時間をとりたいと考えています。そして、それらの質問をどのように組み合わせて学生の学びを深めることができるか話し合うことで、参加者の皆さんの優れた質問技法を共有し、後期からの授業準備に役立つヒントを持ち帰っていただきたいと考えています。

■準備物や事前課題

授業で学生によく尋ねる質問（10個）を A4 用紙1枚に記載し、必ずご持参ください。

■主な受講対象

授業の際、効果的な質疑応答の時間が持てていないと感じている教員や、より深い学びにつながる質問をしたいと考えている教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 授業で使用する質問が持つ機能について説明できる。
2. 自分の授業で用いている質問の型を分類できる。
3. 使っている質問を、学生の学びをより深める質問に変えることができる。
4. 使用する質問の型を授業の展開に合わせて適宜変えることができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2403A

知財リスク対応の基礎知識並びに知財人材育成の授業デザイン

■講師

木村　友久（山口大学　国際総合科学部　教授　（併任)知的財産センター　副センター長）
宮崎相互銀行職員、宮崎県職員、宮崎県立高校、都城工業高等専門学校を経て、2002 年から山口大学。山口大学では、メディア基盤センター、技術経営研究科を経て 2015 年度から国際総合科学部の知財科目を担当。日本工学教育協会工学教育賞、産業財産権制度関係功労者表彰（知財教育で特許庁長官賞）を受賞。基本の研究領域は知的財産法務であるが、知財教材開発や特許検索システム開発も担当している。
http://www.kim-lab.info/essay.html

■プログラム概要

知的財産の重要性認識の高まりに比例して、日常的に知財紛争が起きる状況が生まれています。これは、受講者の所属組織で紛争に巻き込まれる可能性を示唆するとともに、大学等が学生の「生きる力」として知財に対する感性を育む何らかの対応をする必要性を指し示しています。後者の知財人材育成については、知的財産推進計画 2016 等でも各組織が知財人材育成に取り組むことを誘導する施策が記述されています。一方で、知財人材育成を実現する場合に、必ずしも知財教育の定義が定まっておらず、目的、学習対象者の設定、発達段階ごとの到達度、教材の選択ないしは作成、教育方法、評価等々、において担当者の個人的なレベルで対応するケースが多いです。今回は、①知財紛争の現状と組織対応の基本を確認する、②組織あるいは学生が知財に対する感性を獲得する知財教育のありかた、③具体的な教育方法の紹介、④組織内で知財人材育成を定常化する方法等を扱います。

■主な受講対象

・学習者の創造性涵養あるいは深い思考を促す教育を、知的財産を軸に実施することを考えている教職員。
・知財教育の進め方および知財教育の意義に関心のある教職員。
・組織の知財リスク対応に関心のある教職員。
・組織の知財に対する感性向上を目的とした研修に関心のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 社会における知財リスク対応力形成の必要性を認識する。
2. 学習対象者別に知財人材育成・教育の目的を設定し、それに対応する知財教育の定義を理解することができる。
3. 2で設定した学習対象者に合わせた授業デザインを設計し教材を作り込む基礎的能力を形成する。
4. アクティブラーニングやジグソー法を組み込んだ授業ができるようになる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）15：30～17：30
会場：愛媛大学城北キャンパス

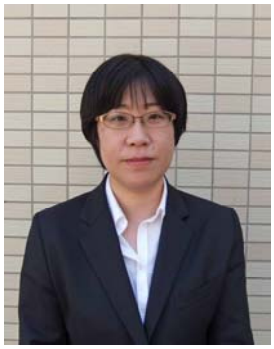
ＦＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2403C

クリティカルシンキングを促す課題設定をしよう

■講師



久保田　祐歌（徳島大学　総合教育センター　助教）
南山大学文学部哲学科卒業。名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。博士（文学）。名古屋大学高等教育研究センター研究員、立教大学大学教育開発・支援センター学術調査員、愛知教育大学教育創造開発機構大学教育研究センター研究員、徳島大学総合教育センター特任助教を経て、2016 年 4 月より現職。全学 FD 推進プログラムの企画・運営等を担当。

■プログラム概要

「クリティカルシンキング（批判的思考）」は、「何を信じたり、何を行ったりすべきかを決定することに焦点をあてた合理的で反省的な思考」のことです。例えば、問題の明確化や論証の分析、決定の根拠となる情報の信頼性を判断したりする能力などがこれに含まれます。実践研究から、学生のクリティカルシンキングは、教授法や課題提示の方法を工夫することで向上させることができると言われています。本プログラムではそうした教授法や参考事例をご紹介するとともに、ご自身の授業でどのような教授法を導入し、どのような課題提示を行うことができるかを考え、その内容をグループで共有する時間を設けます。

本プログラムでは、クリティカルシンキングの教育目標や育成上の課題を理解した上で、学生のクリティカルシンキングを促す課題設定（個人およびグループワークを行う際の手法と課題内容の設定）の方法を身につけることを目指します。

■主な受講対象

・クリティカルシンキング教育の理論について関心のある教員。
・授業で学生のクリティカルシンキングを鍛えるための手法を取り入れたい/取り入れている教員。
・他の教員と学生のクリティカルシンキングを鍛えるための手法を共有し、授業改善に活かしたい教員。

■本プログラムの到達目標

1. クリティカルシンキング教育の目標や課題を説明できる。
2. クリティカルシンキングを促す教授法や課題設定のポイントを説明できる。
3. 自身の授業で用いる課題をつくることができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）15：30～17：30
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

プログラム番号　2403D, 2601D

ルーブリック評価入門−考える、つくる、活用する−

■講師

俣野 秀典（高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師）
北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015 年より現職。放送大学非常勤講師（ファシリテーション入門）。
教育評価や教育方法を中心に、FD を含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップを開発・支援・実施しており、大学コンサル・教員コーチングの実績も多数ある。

■プログラム概要

成績評価について、多様な評価基準を設定することが求められております。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では、“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し、配点 30 点とする”との例が示されたりしており、「ルーブリックって何？？」と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは、成績評価の目的・意義から出発して、高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、評価指標として活用されます。本プログラムでは、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

■主な受講対象

・目標に準拠した評価方法を習得したい教員。
・評価について関心のある教職員。
・協同型アクティブラーニングを体験したい教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる。
2. ルーブリック評価の意義を説明できる。
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる。

■日時・会場

日時：（2403D）平成28年8月24日（水）15：30～17：30
　　（2601D）平成28年8月26日（金）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

※2403Dと2601Dは同内容のため，どちらか一方の受講となります。

ＦＤ，講義中心

プログラム番号　2403E

大人数講義法の基本

■講師

小林　直人（愛媛大学　学長特別補佐、教育・学生支援機構教育企画室長、医学部附属総合医学教育センター長　教授）
昭和 63 年 3 月東京大学医学部医学科卒、平成 7 年東京大学にて博士（医学）の学位取得。平成 17 年度より愛媛大学医学部教授、平成 21 年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任、平成 27 年度より学長特別補佐（教育企画・能力開発を担当）。教育担当理事（教育・学生支援機構長）のもと、大学全体のFDをミクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。

■プログラム概要

「よい」講義とはここでは、聞き手の学生にとって分かりやすく、知的な緊張感があり、さらに学生が参加する（した気にさせる）講義、ということにします。大人数での講義にはデメリットも多いのが事実ですが、現在の高等教育の実情を考えればこのような授業形態を避けることも不可能です。

本プログラムでは，大講義室でも学生とコミュニケーションを取る方法、学生を積極的に講義に参加させる方法や授業効果を高める方法など、大人数の学生を聴衆とした「よい」講義をするために気をつけておかなければならない様々な授業スキルを、実例やワークを通して習得することができます。

また昨今の高等教育に強く求められている参加体験型授業/アクティブ・ラーニング型授業の一例として、受講者に実際にグループワークを体験していただきます。講義を受け持つようになって間もない教員の方はもちろん、自分の講義を振り返りたいと思われている方、また職員の方々も是非受講してください。

このプログラムでは、参加者の皆さんが日頃実践している工夫も披露して頂きます。ご自分の経験（失敗談も歓迎です！）や他で見聞きした実践例を共有しましょう。きっと、明日の授業に役立つヒントが見つかります。

■主な受講対象

まだ講義経験がないか数年未満の講義経験しかない教員の方を歓迎します。また、学務系の職員の方にとっては、大学の講義に今求められていることについて考えるよい機会になると思います。

■本プログラムの到達目標

1. 学生にとってよい授業とはどのようなものかを具体的に説明できる。
2. 自分の経験に基づいて、大人数講義のメリットとデメリットを列挙することができる。
3. 「学生中心の大学」の実現のためによい授業ができるようになる。
4. 大講義室ならではと言える様々な授業スキルを、実際の体験を通して習得し自分の授業に生かすことができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）15：30～17：30
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2403F

経験学習入門

■講師

高橋　平徳（愛媛大学　教育・学生支援機構　講師）
専門は生涯学習論、組織論（人的資源管理）。2002 年早稲田大学教育学部卒業、2011 年早稲田大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。2016 年北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。修士（教育学）、博士（経営学）。2011 年千葉大学大学院看護学研究科特任助教、2014 年札幌医科大学医療人育成センター特任助教を経て 2015 年より現職。近年の論文に、「救急救命士の経験学習: 経験と能力の関係性」（日本保健医療福祉連携学会『保健医療福祉連携』第 8 巻 1 号、2015 年）、「現場における学習研究の現状と課題」（北海道大学経済学研究科『経済学研究』第 65 巻 2 号、2015 年）がある。

■プログラム概要

私たちは日々何かを経験し、それをもとに考え、自分自身を作っています。学生や部下にも豊かな経験を与え成長してほしいと考えておられるでしょう。しかし、経験学習とは具体的にどのようなものでしょうか。その重要性を実感していながらも、いざ説明や実践となると、とまどわれるのではないでしょうか。

本プログラムは、「経験学習入門」として、その基本を押さえられる機会となるよう構成しています。経験学習はどのような考え方から生まれたのか、どのように経験から学んでいるのか、どのような経験が学びにつながるのか、経験から学ぶためにはどのような力が必要なのか、経験から学ぶことをどのように支えていくことができるのかなどを、レクチャーとグループワークによって理解します。

■準備物や事前課題

受講者ご自身のこれまでをふりかえり、成長のきっかけとなった出来事と、そこから得られた教訓や感情について思い出しておいてください。

■主な受講対象

経験学習の理論や実践に関心のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 経験学習の概念を説明できる。
2. 経験学習の過程を説明できる。
3. 成長を促しやすい経験を説明できる。
4. 経験学習に必要な力を説明できる。
5. 経験学習を支援する視点を説明できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月24日（水）15：30～17：30
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2501A

研究指導入門−卒論作成を支援する−

■講師

近田　政博（神戸大学　大学教育推進機構　教授）
平成 2 年、名古屋大学教育学部卒、平成 7 年、名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程を満期退学し、名古屋大学教育学部助手（比較国際教育学講座）。平成 10 年、同大学に新設された高等教育研究センターの専任講師。のち助教授、准教授。中井俊樹氏と 16 年間にわたり、ピンチの連続を切り抜けながら教授法や各種 FD・SD プログラム等の開発に従事。平成 15 年、博士（教育学、名古屋大学）。平成 18 年、同大学大学院教育発達科学研究科を兼担（高等教育学講座）。平成 26 年、神戸大学大学教育推進機構教授（大学院国際協力研究科教育協力論講座兼担）、平成 27 年、同大学大学教育推進本部副本部長（現在に至る）。

■プログラム概要

日本の大学では授業改善についてはさまざまな工夫がなされてきましたが、ゼミや研究室運営、卒論・修論の指導については担当教員に一任されることが多く、実態がよくつかめていないのが現状です。しかし、大学教員として採用されると、授業を担当するだけではなく、多くの場合は指導教員として学生を受け持ち、卒業論文、修士論文、就職支援などに大きな役割と責任を果たすことになります。

研究指導における第一歩は、学生の多様性を尊重しつつ、学生との間に個人的な信頼関係を築くことです。そして、学位論文作成における専門的な指導だけでなく、そのプロセスを通じて学生の全人格的な発達や成長を促すことが重要です。具体的には、論理的思考、多文化理解、チームワークのスキルなどをゼミ・研究室における専門教育の中で培うことが求められます。研究指導は狭い意味では大学院教育で用いられることが多いですが、本プログラムでは学士課程におけるゼミ・研究室教育まで射程を広げて扱います。

■準備物や事前課題

これまでご自身がどのような研究指導を受けてきたかを振り返ってみてください。

■主な受講対象

これまで大学での授業経験はあるものの、ゼミや研究室を任されて卒論・修論等を指導してきた経験が少ない、あるいはこれから直面することになる教員のみなさんを歓迎します。これまで日本の大学では初年次教育など「入口」の教育については熱心に議論を行ってきました。その一方で、「出口」に相当するゼミ・研究室教育、卒論・修論指導などについては、大学院教育の FD が義務化されているにもかかわらず、議論があまり深まっているとは言えません。本プログラムではこの点に関心を持つ大学教員を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 授業と研究指導の本質的な違いを説明することができる。
2. 学生の多様性に配慮しながら、教員として学生と信頼関係を築くための方法を理解し、説明することができる。
3. 自分のゼミ・研究室運営の方針を具体的に表現することができる。
4. 卒論・修論指導をする上で、実現可能な計画や倫理的な配慮について説明することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2501B

学生対応の心得・入門編
-職員として気がかりな学生とどう向き合うか-

■講師

藤巻　晃（徳島文理大学　総務部庶務・渉外グループ　事務主任）
1999 年より徳島文理大学に勤務。総務課、入試広報部を経て、2011 年より現在の部署に配属。
SPOD では、講師養成研修、SDC 養成講座フォローアップセミナー等を受講。また、2014 年・2015 年にわたり 5 期生ゼミ長として SPOD 次世代リーダー養成ゼミナールを受講。
SPOD 新任職員研修では、2012 年に「ビジネスマナー入門」、2014 年に「コミュニケーション入門」の講師を担当。昨年は SPOD フォーラムにおいて、「若手職員へ贈るチームワーク入門～『目の前の仕事をこなす』からのステップアップ～」の講師を次世代リーダー養成ゼミナール 5 期生として担当。また、学内SD研修では、2015 年に「学生支援における大学職員の役割と対応について」の講師を担当。

■プログラム概要

近年、高等教育機関への進学率が上昇したことなどにより、資質や能力、興味・関心などの面で極めて多様な学生が入学しています。こうしたことから徳島文理大学では、昨年度ワーキンググループを立ち上げ学生支援（学生相談）に関する調査を行いました。

本プログラムでは、まず高等教育機関の職員としての役割や廣中レポート以降の歴史的な流れを学びます。さらにグループワークでは、徳島文理大学の調査結果を参考に窓口に訪れる気がかりな学生とどのように接すればよいかを考えます。ぜひ皆さんも日頃実践していることや経験を披露してください。

また、平成 28 年 4 月より施行された「障害者差別解消法」の概要についても学びます。

気がかりな学生が豊かな学生生活を送ることができるように、学生支援（学生相談）を教育の一環としてとらえてサポートできるようになりましょう。

■主な受講対象

採用1～3 年程度で 30 歳未満の職員。または、窓口担当として学生とよりよい関係を築きたいと思っている若手職員。

■本プログラムの到達目標

1. 高等教育機関の職員としての役割を説明できる。
2. 学生支援・学生相談についての歴史的な流れを説明できる。
3. 窓口対応を教育の一環としてとらえ、職員として適切な行動をとることができる。
4. 障害者差別解消法の概要を説明することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2501C

日常の経験知で仮説を立て、学内にあるデータを検証する
−データを活用した予防的・開発的学生支援をはじめてみませんか？−

■講師

杉田　郁代（高知大学　大学教育創造センター　特任准教授）
比治山大学　准教授　IR 委員長を経て、平成 27 年度より高知大学に着任。専門は、教育心理学と高等教育における授業づくり、学生支援。臨床心理士、学校心理士。

■プログラム概要

学生たちに接する中で、気づく疑問や違和感はありませんか。授業の中で、事務の窓口対応の中で、日々の経験の中で感じる経験知を、学内のデータを用いて検証してみませんか。データを検証することにより、予防的・開発的な学生支援の糸口を見つけることにもつながります。

本プログラムは、IR 的な要素を含みますが、専門的に IR をという人ではなく、入門編です。専門的な分析方法ではなく、アクセスとエクセルを用いた傾向を掴むことを目的とした基礎編です。日常の中で感じた経験知から仮説を立てて、データ検証を始めてみたいという方を対象にしています。学生支援や教務・学務関連の担当の教職員の方、これから IR を始める人、学生に直接かかわる事務部門の方はぜひ受講してください。

この研修では、参加者の皆さんが日ごろ感じていることを少し共有しながら、どのデータとデータを組み合わせれば、よいのかなどを一緒に検討するグループワークも含まれています。今回は、経験知から仮説を立てて、データを選択し、つなぎ合わせ、傾向を見るという一連の作業工程について学びます。

■主な受講対象

・学生支援や教務・学務関連の担当教職員。
・学生に関わる窓口を担当する部署の職員。
・データ IR ではなく、人間 IR として、学生に関わる経験知をお持ちの方も大歓迎です。

■本プログラムの到達目標

1. 経験知から、仮説を立て、分析を行うまでの手順を説明できる。
2. 予防的学生支援（休学・中途退学を防止する）について説明できる。
3. 予防的学生支援に必要なデータを特定し、つなぎ合わせ傾向を確認することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2501D

部下を育てる評価のコツ−自己理解と他者理解を踏まえて−

■講師

阿部　光伸（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　講師）
東北大学大学院教育学研究科修了。専門学校での 15 年の教員生活を経て，平成 15 年度から東北文化学園大学に勤務し学生課長，教務部長，学園事務局部長として人事評価を経験。現在，職場内人材育成をテーマにSDを担当。平成 24 年 4 月から現職。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD−SDC。

■プログラム概要

高等教育機関においても人事評価の必要性／重要性が謳われて久しいですが，“人事評価に時間を掛けることが出来ない／公平・納得性のある評価が出来ているか不安／形骸化している”といった悩みを多く聞きます。

今回の人事評価研修では，人事評価が人材育成の一手法であることを紹介するとともに，それが組織の活性化と個人の成長を促すために有効な手段となりうることを紹介します。また，受講者の皆様にはワークを通じて部下の育成・指導・評価のポイントを理解していただき，能力開発を促す手法を身に付けていただきます。

■主な受講対象

課長相当職の職員を主対象としますが，人材の育成・指導・評価について関心がある方の受講も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1．メンバーの育成・指導・評価のポイントを説明できる。
2．メンバーの特性に応じた目標達成プロセスへの関わり方，支援の仕方を説明することができる。
3．面談の進め方を説明できる。
4．人材育成につながる評価を行うことができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）10：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，講義中心

プログラム番号　2501E

国際連携系職員養成プログラムレベルⅠ
海外派遣入門

■講師

塩川　雅美（梅光学院大学　副学長＜国際交流担当＞、梅光学院大学高等教育開発研究所　特任教授、梅光学院　統轄本部次長＜国際交流・研究支援担当＞）
神戸市外国語大学スペイン語学科卒業。OA 機器メーカー勤務を経て、1988 年に学校法人谷岡学園神戸芸術工科大学に就職。神戸芸術工科大学では、国際交流と広報を担当。京都工芸繊維大学国際交流センター（助教授）、関西国際大学（国際交流センター次長）、学校法人常翔学園総務部国際交流コーディネーター、同学園摂南大学学長室大学改革アドバイザーなどを経て、2016 年 1 月から梅光学院大学学長特別補佐に就任。2016 年 4 月より現職。職務と並行し、1995 年に神戸大学大学院国際協力研究科博士前期課程に社会人入学（1997 年修了）。再び 2000 年に同研究科博士後期課程に編入学し、2005 年に博士（学術）の学位取得。また、学行政管理学会(JUAM)役員、非営利特別活動法人国際教育交流協議会（JAFSA)常務理事、大学マネジメント研究会理事など歴任。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。

■プログラム概要

「海外派遣」を単なる「海外に行く機会の提供」にとどめないためには、「派遣中」のみに目を奪われないことが重要です。次代を担う学生たちが、海外に出て「何を学び」「何を持ち帰るのか」「帰国後、どう活かすのか」という全体のデザインへの目配りという視点が担当者には求められます。実務的には、各種派遣制度の情報を学生に提供し、海外渡航に伴う手続きや、リスクマネジメント（「危機管理」）について学生に正しい説明ができることが求められています。今回の研修は、「国際連携系職員養成プログラム」の「レベルⅠ」として、「海外派遣業務」の基本について学び、派遣業務担当者としての「芽（目）」をお持ち帰りいただきます。

■主な受講対象

大学等で海外派遣業務に携わっている方。教員、職員を問いません。初心者及び経験年数が短い方はもちろんですが、経験年数の長い方でも、「おさらい」と「情報交換」のために参加ください。

■本プログラムの到達目標

１．海外体験の意義について説明することができる。
２．自大学及び政府等が実施する海外派遣制度について説明することができる。
３．派遣に際しての手続きを説明することができる。
４．派遣に際しての注意事項を説明することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2501F

コーチング入門

■講師

小林　忠資（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　特任助教）
名古屋大学教育学部卒業。同大学院教育発達科学研究科教育科学専攻満期退学。名古屋大学高等教育研究センター研究員、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特定研究員を経て、2016 年 5 月より現職。大学における FD・SD、現職看護師向けの教育研修など、専門職を対象とした人材育成に関わっている。

■プログラム概要

職場には、先輩が後輩を個別に指導するさまざまな場面があります。そのような場面では、先輩が後輩に答えを提示することもできます。しかし、それでは後輩の成長を期待することはできません。後輩の成長を促す指導をするうえで役に立つのが、コーチングです。コーチングは、人材開発の一つの技法で、相手の目標達成を促すためのものです。相手に答えを提示するのではなく、コミュニケーションをとおして相手のもつ答えを引き出す点に特徴があります。本プログラムでは、コーチングの理論やさまざまなスキルについて学習します。職場での具体的な事例をもとに、コーチングのさまざまなスキルを理解し、職場で活用できるようになることを目指します。また、コーチングのスキルは、学生を指導するうえでも役に立つものです。

■主な受講対象

・後輩指導を担当する職員。
・コーチングに関心のある職員。

■本プログラムの到達目標

1. コーチングの特徴を説明することができる。
2. コーチングのスキルを 5 つ以上挙げることができる。
3. 後輩を指導する場面に応じて、コーチングのスキルを活用することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

プログラム番号　2502A

グラフィック・シラバスを書こう！

■講師

宮田　政徳（徳島大学　総合教育センター　教育改革推進部門　准教授）広島大学大学院　文学研究科修了（英語学）。2001 年 10 月より徳島大学　大学開放実践センター勤務後、2013 年 4 月より徳島大学　教育改革推進センターへ異動。2014 年 4 月より総合教育センターへ異動。徳島大学では、2002 年より全学FD企画・運営を担当。SPOD では、2010 年よりコア校徳島大学FD担当。

■プログラム概要

グラフィック・シラバスは、通常のシラバス（テキスト・シラバス）では表現できない学習内容をフロー・チャートやダイアグラムや樹形図を使って、一枚のマップで示したものです。学生はグラフィック・シラバスを見ることで、テキスト・シラバスでは分からなかった、毎回の授業目標・内容の流れとそれらの関連性を容易に理解し、授業全体の概念をつかむことが出来ます。一方教員にとっては、グラフィック・シラバスを書くことによって、授業全体の構造を視覚的に概念化し、毎回の授業をよりスムースな流れで行うことが出来るようになります。

グラフィック・シラバスは喩えていえば、学部や学科の授業のカリキュラムを視覚的に表した「カリキュラム・マップ」のようなものです。このカリキュラム・マップで授業間の関連性がわかるのと同じように、グラフィック・シラバスでは、毎回の授業が授業全体の中でどの位置にあるのかが分かります。

本ワークショップでは、グラフィック・シラバスの概念、その意義や特徴を解説し、作成の仕方を説明した後、参加者皆さんに自身のグラフィック・シラバスを書き上げて頂きます。

■準備物や事前課題

参加される方は当日必ずご自分のテキスト・シラバスを一部ご持参下さい。

■主な受講対象

シラバスや授業を改善したい教員。

■本プログラムの到達目標

1. テキスト・シラバスとグラフィック・シラバスの違いを説明できる。
2. グラフィック・シラバスの特徴を説明できる。
3. グラッフィク・シラバスを書き上げる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2502B

思考プロセスの「見える化」と共有
−話し合いの生産性を高めよう−

■講師

吉田　広毅（常葉大学　教育学部　教授、初等教育課程長）
平成 14 年度より常葉学園大学（現常葉大学）教育学部講師。准教授を経て、平成 26 年度より同大学ならびに大学院教授。平成 25 年度より教育コーディネーターを兼任し、主として全学教養教育のカリキュラム開発・改善を担当。平成 27 年度からは教育学部初等教育課程長を兼任し、教員養成カリキュラムを含めた FD・SD をミクロ・レベルからマクロ・レベルまで担当。

■プログラム概要

授業で学生に話し合いをさせると、会議で教職員が議論すると、意見は多く出るものの空中戦に終わって意見がまとまらなかったり、逆に意見が出ずに消極的な妥協に終わったりすることがありませんか。この研修では、議論の生産性を高める手立ての一つとして、シンキング・ツールを使った思考プロセスの「見える化」の方法を紹介します。具体的には、例えば、議論をまとめる、つまり収束的思考のためのツールや自由に意見を出してイメージを膨らます、つまり発散的思考のためのツールを扱います。

研修では、実際にグループワークを行う中で、複数のシンキング・ツールを活用して頂きます。アクティブ・ラーニングの生産性を高めたいと願う教員の方々、会議の生産性を高めたいと願う職員の方々のご参加をお待ちしております。

■主な受講対象

職務経験や職種にかかわらず、会議や授業を行うと参加者の議論がかみ合わなかったり、まとまらなかったりして困っている教職員の受講を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 話し合いの生産性を高める要件を説明できる。
2. 思考プロセスを可視化する意義を説明できる。
3. 思考に応じたシンキング・ツールを活用できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

プログラム番号　2502C

始めよう！アクティブ・ラーニング
−協同学習・文章作成の技法編−

■講師

西本　佳代（香川大学　大学教育基盤センター　講師）
広島大学教育学部第五類教育学系コース卒業、同大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期修了、同研究科教育人間科学専攻博士課程後期退学。平成 20 年より香川大学教育・学生支援機構の特命助教として勤務。山口福祉文化大学（現・至誠館大学）ライフデザイン学部講師を経て、平成 27 年 4 月より現職。専門は教育社会学。

■プログラム概要

２０１２年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」以降、アクティブ・ラーニングはいずれの大学においても取り組まなければならない内容として認識されるようになったのではないでしょか。このプログラムでは、アクティブ・ラーニングに関する基礎的な知識と共に、その技法の一部をご紹介します。アクティブ・ラーニングと一口に言っても、その内容は広範多岐にわたります。そこで、本プログラムでは、文章作成の技法に焦点を絞り、その技法を体験しながら、ご自身の授業でどのように取り入れることができるか検討していただくことにしました。

なお、文章作成の技法のほか、①話し合いの技法、②教え合いの技法、③問題解決の技法、④図解の技法を扱った SPOD 研修プログラムも開講されます（９月２６～２８日、於・香川大学）※。アクティブ・ラーニングの技法をさらに学びたい方は、シリーズでの受講をおすすめします。

※加盟校教職員に5月に配付のSPOD研修プログラムガイド2016 P. 21～23参照
（プログラムガイドは、SPODホームページにも掲載しています）

■主な受講対象

文章作成に関するアクティブ・ラーニングを授業に取り入れようと思っている教員。本プログラムでは基礎的な技法を扱いますので、特に授業経験の少ない教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブ・ラーニングとはどのようなものか、説明することができる。
2. 文章作成の技法を3つ以上挙げて、その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に文章作成の技法を導入することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，講義中心

New!!

プログラム番号　2502E

トップリーダーセミナー　大学ガバナンスとリーダーシップ

■講師

大場　淳（広島大学　高等教育研究開発センター　副センター長　准教授）
大学院教育学研究科高等教育学専攻で高等教育組織・職員論を担当する他、大学ガバナンスを始めとして外国の高等教育に関する比較研究等に取り組んでいる。所属学会は、日本高等教育学会、大学行政管理学会、日本教育学会、日仏教育学会、フランス教育学会、Réseau d'Étude sur l'Enseignement Supérieur（フランス高等教育研究会）。関連する最近の著作に、「学校教育法・国立大学法人法の改正と国立大学のガバナンス」（大学評価研究第 14 号、2015 年）、「Japon : réforme de la gouvernance universitaire＝日本：大学ガバナンスの改革」（Revue internationale d'éducation No.70、2015 年）、『International Trends in University Governance: Autonomy, self-government and the distribution of authority＝大学ガバナンスの国際的動向：自律性、自治、権限配分』（共著、Routledge、2014 年）『組織としての大学：役割や機能をどうみるか』（共著、岩波書店、2013 年）がある。

■プログラム概要

近年、大学のガバナンス改革が世界的に進められています。日本においても重要な政策課題として取り組まれ、平成 26 年には関連する法律の改正が行われて翌年に施行されました。当該改正は執行部権限の拡大等を図ったものですが、これは従前から進められてきた大学内の意思決定に関する権限集中や学長リーダーシップの強化と軌を一にするものです。政策は一貫したものですが、十分に効果を挙げてきたとは言い難く、その背景には政策形成段階における議論において必ずしも先行研究が十分に踏まえられていないことが指摘されています。本講義では、これまでのガバナンス改革を俯瞰し、日本の制度が国際的に見てどのような位置付けにあるのかを確認します。そして、関連する先行研究を参照しつつ、日本の大学ガバナンス改革の在り方やリーダーシップについての政策の問題点を掘り下げることとしています。

■主な受講対象

大学の管理運営や大学自治の在り方、これまでの関連する大学改革、大学と政府との関係、外国の大学の在り方などに関心のある方はどなたでも歓迎します。

■本プログラムの到達目標

大学ガバナンスやリーダーシップに関する先行研究を理解し、現在の制度や大学運営の在り方について批判的に検討できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2502F

ディープラーニングに誘うアクティブ・ラーニングの手法
−物理、化学の実践例より−

■講師

立川　明（高知大学　大学教育創造センター　准教授）
S62 年高知大学理学部卒。H10 年九州大学にて博士（工博）の学位取得。H2 年より高知大学理学部化学科助手。計算化学と情報処理の教科書執筆。H16 年より大学教育創造センター准教授。
参加型授業の開発，担当。実践をふまえたアクティブ・ラーニングに関する FD 研修講師を学内外で多数担当。アクティブ・ラーニングの成果をまとめた Tips 執筆。

■プログラム概要

口頭で教える方法で，学生は実力を付けていますか？期末試験で良い成績をとれるのは，一夜漬けのおかげだったりしませんか？その知識，次の年度の授業ではもう忘れていませんか？

長く記憶に残る知識になるためには理解を伴うこと，アウトプットの機会があること，反復の機会があることが重要です。

この研修では，高知大学で行っている化学の授業，産能大学小林先生の行っている物理の授業を例にアウトプットを中心にした授業方法を紹介し，ディープラーニングに誘うための参加型授業に必要な要素を紹介します。以下の順序で進める予定です。

1. 初回の授業で何をすべきか
2. 授業の組み立てはどのようにすべきか
3. 試験紙法を体験する
4. 教員が注意すべき事は何か

参考：高知大学発行 Tips5，小林昭文著「アクティブラーニング入門」（産業能率大学出版部）

■主な受講対象

講義型授業に限界を感じている方，授業方法をアクティブ・ラーニングに変えたい方，授業中の居眠りや内職をやめさせたい方，学生の成績を上げたい方，時間外学習を増やしたい方，教科教育でキャリア支援を同時に実現したい方。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブ・ラーニングのための場づくりができる。
2. 失敗しないアクティブ・ラーニングの要素が言える。
3. 試験紙法とは何か同僚に説明できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ　シンポジウム

New!!

プログラム番号　2503G

経験を学びに変える教育と能力開発

■講師

日向野　幹也（早稲田大学　大学総合研究センター　教授）
1978 年東京大学経済学部卒業、1983 年同大学院社会科学研究科経済政策専攻博士課程単位取得退学、1984 年経済学博士（東京大学）。1984-2005 年東京都立大学経済学部勤務（講師、助教授、教授）。2005-2016 年立教大学教授、2006 年経営学部 BLP を立ち上げ拡充（主査）。2013 年全学 GLP 立ち上げ（主査）。アクティブ・ラーニングとリーダーシップ教育の模範事例としてとりあげられる。2016 年より早稲田大学でも正課リーダーシップ教育開始。

村山　孝道（京都文教大学　教務課　課長、大学コンソーシアム京都 SD 研修委員会委員長）
1993 年 3 月大正大学仏教学部卒。2016 年 3 月同志社大学にて修士（総合政策科学）取得。2016 年 3 月より同大学院総合政策科学研究科技術・革新的経営専（一貫性博士課程）3 年次転入、在学中。研究領域は大学職員の HRM（人的資源管理）論。2016 年 4 月より、大学コンソーシアム京都 SD 研修委員会委員長。大学職員「人間ネットワーク」副会長。2009 年より学生 FD 活動に従事。「大学を変える、学生が変える」（ナカニシヤ出版）を共著。

村田　晋也（愛媛大学　教育・学生支援機構　講師、大学間連携共同教育推進事業 UNGL 事業推進責任者）
平成 24 年 3 月九州大学大学院経済学府博士後期課程満期退学。平成 22 年 4 月より九州国際大学経済学部助教、平成 26 年より愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室講師。同年より大学間共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシップ・プログラム（UNGL）」事業推進責任者として、国内外での実践的な研修を通じて学生の能力開発支援（主にリーダーシップ養成）に取り組んでいる。愛媛大学リーダーズ・スクール（ELS）責任担当教員。専門は、組織論、人的資源管理、リーダーシップ論。

コーディネーター：小林　直人（愛媛大学　学長特別補佐、教育・学生支援機構教育企画室長、医学部総合医学教育センター長、教授）

■プログラム概要

これまで、企業等における人的資源開発の分野では、経験や体験を学びに変える人材育成手法の効果性に広く注意が向けられてきました。また、この体験学習の手法は、学校教育においても以前から用いられてきました。とくに近年では、就職に先立ち、実社会で有用となる実践的な知識や能力を大学在学中に体得しておくよう求められていること等を背景に、大学においても様々な経験をし、そこで得た気づきを学びに変えること、またそうする力を会得することが学生に期待されています。他方で、「経験を学びに変える」と一口で言っても、その実際は多種多様であり、実践に際しては程度や効果性を考慮しつつ、適切なものを選択的に用いる必要があることも事実です。

そこで、本シンポジウムでは、「経験を学びに変える教育と能力開発」というテーマを設け、これに取り組む大学や大学間連携事業の事例を考慮しつつ、大きく次の2つのアプローチからその現状と課題を共有することを目的とします。すなわち、⑴どのように学生の経験を主体的な学びに変えることができるか、⑵学生の学びを支援する教職員にはどのような能力開発が求められるかという2点です。具体的には、「学生の経験を学びに変えるための工夫」「経験をベースにした学習を進めていく上での課題と注意点」「経験を学びに変えるためにリフレクションをどのように用いるか」「教職員自身はどのように自分の経験を学びに変えることができるか」等の論点を検討することで、参加者諸氏の役に立つ情報の提供を目指します。なお、当日は 3 名のシンポジストによる実践事例の報告、その後、質疑応答及びパネル・ディスカッションを行う予定です。

■主な受講対象

教員、職員、その他 SPOD フォーラム 2016 に参加される全ての方のご出席を歓迎いたします。

■本プログラムの到達目標

1. 学生の経験を学びに変える工夫・手法・注意点について、事例を交えて紹介できる。
2. 学生の学びを支援する教職員にはどのような能力が求められるかを説明できる。
3. 学生の主体的な学びを促進する教職員能力開発のアイディアについて説明できる。

■日時・会場

日時：平成28年8月25日（木）15：30～17：45
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，講義中心

New!!

プログラム番号　2601A

視覚障害学生支援の基礎−テキストデータ化の体験−

■講師

宮城　愛美（筑波技術大学　障害者高等教育研究支援センター　講師）
平成 20 年 3 月千葉大学大学院自然科学研究科修了、博士（工学）の学位取得。平成 18 年度より筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター勤務。視覚障害学生の授業を担当するとともに同センターの支援交流領域担当として全国の高等教育機関に在籍する視覚障害学生の支援に携わる。

■プログラム概要

現在、視覚に障害のある学生が全国に約 700 人在籍しており、各地の大学に入学するようになっていますが、視覚障害学生の修学というとなかなかイメージがわかないかもしれません。支援ニーズは、大きく分けると移動と情報アクセスの二点です。視覚障害学生の受験・入学の前に慌てることなく準備を進められるように、本プログラムをご活用ください。

プログラムの冒頭では視覚障害学生の入学から卒業・就職までの修学における基本を解説し、支援のポイントをおさえていただきます。続いて、情報アクセスにおける支援を取り上げ、教科書などの学習資料をアクセシブルな媒体に整えるというメディア変換の作業を体験します。既に視覚障害学生の在籍する多くの大学で行われているテキストデータ化ですが、時間がかかる、校正作業に悩むなどの声も聞かれます。作業の効率化のヒントをお伝えします。後半の時間には、各参加者が各大学で視覚障害学生を受け入れるシミュレーションを行ないます。

■主な受講対象

視覚障害学生の支援に関心のある教職員。特に、まだ視覚障害学生を受け入れたことのない大学の教職員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 視覚障害学生の支援ニーズと方法の概要を説明できる。
2. テキストデータ化を実際の体験を通して習得し、効率化のポイントを支援に活かすことができる。
3. 視覚障害学生の入学を想定して、各大学における修学支援の準備をイメージできる。

■日時・会場

日時：平成28年8月26日（金）10：00～12：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，ワーク中心

プログラム番号　2601B

研究支援職員としての基礎知識−ゼロから始める研究者との協働−

■講師

宮内　卓也（高知大学　法人企画課　法人企画係長）
平成 15 年東北大学大学院法学研究科博士前期課程公共法政策専攻修了。平成 15 年高知大学就職総務部総務課法規担当(平成 17 年 3 月まで)。国立大学法人化後の規則整備担当（研究系の体制・契約書ひな形等含む）。平成 17 年文部科学省研究振興局学術研究助成課研修生(平成 18 年 3 月まで)科研費担当、研究助成財団・学会等団体の監査担当。平成 18 年高知大学研究協力部地域連携課知的財産担当(平成 23 年 7 月まで)。平成 23 年高知大学研究協力部研究協力課科研費等競争的資金担当(平成 24 年 7 月まで)。平成 24 年高知大学法人企画課法人企画係主任教育組織改革（学部設置・改組等）担当。平成 27 年高知大学法人企画課法人企画係長(現在に至る)。

■プログラム概要

「研究支援」というと、「産学連携・知的財産」や「科研費」のように、「専門的」「複雑」との理由で敬遠されがちな分野です。しかし、大学は教育機関であると同時に「研究機関」であり、教員は「研究者」の側面も併せもっています。また、大学における研究費の多くは「競争的資金」であり、学生の「研究成果」である学位論文など、「研究系」以外の職員も様々な場面で「研究」に関わることになります。加えて、近年の科学技術政策を見ると、研究機関が「研究者を研究に専念させることができる体制」を構築するための施策が展開され、そこでは職員が果すべき役割も大きくなってきています。

そこで、本プログラムでは、先ず第２期科学技術基本計画（H13）以降の科学技術政策を概観します。その上で、ケースを用いて「競争的資金」などの基礎的な知識・制度に触れながら、グループワークを通して「研究機関（大学）における職員の役割」を考えます。

■主な受講対象

研究系(研究協力・産学連携・知的財産など)業務未経験又は経験１年未満の職員。

■本プログラムの到達目標

１．第２期科学技術基本計画（平成１３年制定）以降の科学技術政策の概要を説明できる。
２．研究機関（大学）における職員の役割について説明できる。

■日時・会場

日時：平成２８年８月２６日（金）９：１５～１２：１５
会場：愛媛大学城北キャンパス

※本プログラムは、９：１５～１２：１５の3時間で実施します。

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2601C

教育データ解釈入門Ⅰ＆Ⅱ

■講師

中山　晃（愛媛大学　教育・学生支援機構　准教授）
平成８年８月より約２年半の兵庫県立公立高等学校臨時講師を経て、平成17年６月、国際基督教大学にて博士（教育学）の学位取得。平成21年度より現職。日本学校心理士会愛媛支部・支部長、大学英語教育学会（JACET）アカデミック＆ティーチング・ポートフォリオ研究会・代表。

清水　栄子（愛媛大学　教育・学生支援機構　講師）
安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。学校法人安田学園安田女子大学、公立大学協会事務局主幹、阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教を経て、2015年４月より現職。著書に『アカデミック・アドバイジング－その専門性と実践－日本の大学へのアメリカの示唆』（単著）がある。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

この講義で扱う教育データ（量的指標）は、①期末試験や英語の検定試験等の結果から得られるテストデータと、②学生を対象とする全学的な調査、授業満足度や個人の意識を問う質問紙等から得られる調査データ、の２種類とします。一コマ目の講義では、前者と後者に共通する項目として、平均値と標準偏差の関係についての基礎的な理解の他、集合データの平均値と関連するデータとの相関関係から一定の命題を推定する際に潜む危険性（例：生態学的誤謬、選択バイアス）を扱います。二コマ目の講義では、①については、相関関係についての理解を深めるグループワークを、②については因果関係について理解につながるグループワークを、架空のシミュレーションデータ（実際に大学の様々な会議等で扱われている教育データを加工したもの）を用いて行いますので、教育データ読み取りのスキルを、体験を通して習得することができます。

■主な受講対象

教職員。入門～やや中級レベルの内容を扱いますので、「基礎的な」統計データ（指標）の読み取り方法と、その際の留意点について、興味のある方をみなさん歓迎いたします。特に、IR 関連データを扱う部署に、初めて配属となった職員の方にとっては、様々な指標をどう評価・判断するのかといったことについて考えるよい機会になるかと思います。

■本プログラムの到達目標

1. 平均値と標準偏差の関係について、具体的に説明できる。
2. 量的データ（指標）の解釈に際し、注意点を簡潔に説明することができる。
3. 相関関係と因果関係の相違点について、簡潔に説明することができる。
4. この研修を通して得られたスキルを、参加者自身の職場で報告されている教育データの解釈に活用することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月26日（金）10：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2601E

管理職・監督職のためのリーダーシップセミナー

■講師

秦　敬治（追手門学院大学　副学長　教育開発センター長　基盤教育機構　教授）
1986 年 3 月に西南学院大学商学部卒業後、学校法人西南学院にて大学職員を 20 年間務め、2006 年 4 月から愛媛大学にて大学教員に転身。愛媛大学では、教育企画室副室長として FD・SD の中核を担い、SPOD の立ち上げにも関わる。また、学生のリーダー養成にも関わり、愛媛大学リーダーズ・スクールや西日本学生リーダーズ・スクールの立ち上げを行った。2014 年 9 月から現職。副学長（学生領域担当）に加えて、FD の中核を担う教育開発センター長、学生リーダー養成を行う追手門学院大学リーダー養成コース長も務め、教員、職員、学生の能力開発に取り組んでいる。加えて、市民向けのリーダーシップ講座等での講師歴も多く、松山市の経営者を中心とした志秦塾の塾長も務めている。専門は高等教育経営論（教育学博士）。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

リーダーシップの発揮は組織の全ての構成員に求められる要素であり、マネジメントを担う管理職・監督職の大学職員には、自身のリーダーシップの発揮だけではなく、部下をはじめとする他者にも効果的なリーダーシップを発揮させることも求められます。

本プログラムでは、自身のこれまでの実践を振り返りながら、自身のリーダーシップの特性に対する理解を深め、リーダーシップに関する理論を実践に活かすための演習を行います。具体的には、これまでの経験や自身の特性を振り返る自己分析を行い、経験からの学びを抽出し、それらの特性を元に選択理論等の理論や類型の特性等を用いて、今後のアクションプランを作成していきます。

これまでのなんとなく上手くいったという経験を理論へと昇華させて行くことの手がかりや手法を学んで行きましょう。

■主な受講対象

職位や部署等の規模は問いませんが、管理職や監督職に就いている大学職員を対象とします。あわせて SD プログラム等を運営する部署の教職員の受講も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 自身の行動に対する振り返りから、自身の得意なリーダーシップの強みと弱みを分析することができる。
2. 自身の経験を選択理論を用いて、分析することができる。
3. リーダーシップの類型や選択理論を用いて、他者に効果的なリーダーシップを発揮するための提案を 1 つ以上することができる。
4. チームの強みを活かした、効果的なリーダーシップを発揮するためのアクションプランを作成することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月26日（金）10：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ，ワーク中心

プログラム番号　2601F

学生の学びやすさと学習意欲を高める授業設計−課題分析図の活用−

■講師

仲道　雅輝（愛媛大学　総合情報メディアセンター教育デザイン室長　兼教育・学生支援機構　教育企画室　講師）
1995 年日本福祉大学社会福祉学部卒業。2009 年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了（専門：教授システム学）。1995 年より日本福祉大学事務職員、2011 年から愛媛大学にて FD・SD や学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。eLC 認定 e-Learning Professional。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

学生の学びやすさと学習意欲を高めるために、ID（インストラクショナル・デザイン）理論を用いて授業設計の手法を学びます。学習意欲は、学びやすさによって維持・促進され、動機づけによって高めることができます。学びやすさや意欲を設計するためには、教員が自身の教授内容を明確にし、学生目線で再構築する作業が必要です。その第一段階として、学生に対して「この授業で何ができるようになればよいのか」が具体的に伝わる学習目標を提示します。次に、教員の頭にある既に構成された教授内容を一旦分解します。これを課題分析といい、分解した学習要素をより学びやすく、意欲の向上に効果的な学習順序になるよう再構築します。本プログラムでは、課題分析のワークを通して、これからの授業改善に役立つヒントを持ち帰っていただきます。

■準備物や事前課題

自身の授業シラバスまたは、授業計画案などをご持参ください。

■主な受講対象

教員。主に授業構成や学習順序を見直したい方、もしくは授業設計に関心のある方。

■本プログラムの到達目標

1. 学習目標を行動目標として明確に表現できる。
2. 課題分析の考え方を説明できる。
3. 自身の教授内容の課題分析図が作成できる。
4. 課題分析図の結果をもとに、授業内容の改善案を立てることができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月26日（金）10：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，講義中心

New!!

プログラム番号　2602A

聴覚障害学生の主体性を引き出す支援
−パソコンノートテイクの体験をとおして−

■講師

宇都野　康子（筑波技術大学　障害者高等教育研究支援センター技術補佐員）
平成 20 年より筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター技術補佐員、現在に至る。パソコンノートテイカー歴 8 年。学内で支援活動を担当するパソコンノートテイカーの養成およびコーディネートを担当するほか、文部科学省認定の教育関係共同利用拠点「障害者高等教育拠点」事業で、他大学のパソコンノートテイク講習会の講師を数多く担当している。

■プログラム概要

障害のある学生の大学への進学率は年々高まっており、聴覚に障害のある学生は全国に約 1500 人在籍しています。聴覚障害学生の支援ニーズのうち最も大きなものは情報アクセスで、授業に参加して周りの障害のない学生と同等の情報が得られるための支援(情報保障)を行う必要があります。聴覚障害学生の受験・入学の前に慌てることなく準備を進められるように、本プログラムをご活用ください。

プログラムの冒頭では、聴覚障害学生の入学から卒業・就職までの修学の流れを解説し、障害の特性や支援のポイントをおさえていただきます。続いて、情報保障の手段のひとつであるパソコンノートテイクを取り上げます。これは、授業中の講師の発話を聞き、パソコンで入力して聴覚障害学生に伝えるものです。この方法について、聴覚障害学生・支援学生のロールプレイを通して情報保障支援の必要性を理解するとともに、パソコンノートテイクによる支援を実施するためのポイントについて学びます。

■主な受講対象

聴覚障害学生の支援に関心のある教職員の方。特に、まだ聴覚障害学生を受け入れたことのない大学の教職員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 聴覚障害学生の支援ニーズと方法の概要を説明できる。
2. パソコンノートテイクの体験をとおして、必要な技術や知識を習得し、聴覚障害学生支援に活かすことができる。
3. 聴覚障害学生の入学を想定して、各大学における修学支援の準備をイメージできる。

■日時・会場

日時：平成28年8月26日（金）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2602B

ラウンドテーブル　これからのＳＤを考える

■講師

久保　秀二（愛媛大学　総務部人事課　副課長）
平成7年愛媛大学事務職員に採用。高知大学、弓削商船高等専門学校での勤務を経験後、愛媛大学に復帰。主に人事、給与の業務に従事し、平成 26 年度から現職。職員の採用活動や人事制度の企画・立案及び人材育成に取り組んでいる。平成 25 年 SPOD-SDC の資格を取得。

織田　隆司（愛媛大学　教育学生支援部教育企画課　副課長）
平成 7 年高知医科大学事務職員に採用。これまで弓削商船高等専門学校、大学評価・学位授与機構、愛媛大学で勤務。愛媛大学では経営企画課、財務企画課、学長秘書室等を経験し、平成 26 年度から現職、SPOD 運営部署を担当している。平成 22・23 年度に次世代リーダー養成研修を受講。

■プログラム概要

近年、さまざまな機関、場所において大学職員のための研修が開催されています。SPOD では平成 20 年の設立以来、組織連携のメリットを活かして FD や SD の取組を行ってきました。

平成 28 年 3 月、「大学設置基準等の一部を改正する省令」が公布され、平成 29 年 4 月1日から、全ての大学等にその職員が大学等の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させるための研修の機会を設けることなど、いわゆる「SD の義務化」について、各機関において対応が求められることとなりました。

本ラウンドテーブルでは、改正された大学設置基準等の概要を確認するとともに、各大学等で行ってきた SD に関する取組事例や課題を共有してこれからの SD の取組を考えることによって、今後の取組のヒントが得られる機会にしたいと思います。また、ぜひ所属機関を越えたネットワーク作りの場としてもご活用ください。

■主な受講対象

・各大学等において SD に携わっている教職員。
・SD に関心のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 大学設置基準等の一部を改正する省令（平成 28 年 3 月 31 日）の概要を説明することができる。
2. 自大学等における SD の取組について説明することができる。
3. 他大学等の SD の取組を共有し、自大学での取組に活かすことができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月26日（金）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ，ワーク中心

New!!

プログラム番号　2602D

ラウンドテーブル　学生の経験を学びに変える

■講師

小林　修（愛媛大学　国際連携推進機構アジア・アフリカ交流センター　副センター長、同モザンビーク交流推進班　副班長、愛媛大学SUIJI 推進室　副室長、准教授）
平成 9 年 3 月北海道大学大学院農学研究科博士課程林産学専攻・修了（博士(農学)）、平成 9 年 9 月愛媛大学農学部附属演習林・助手、平成 21 年 7 月愛媛大学国際連携推進機構アジア・アフリカ交流センター・准教授、演習林にて学生教育と社会貢献（障害者対象）を兼ねた森林環境教育事業を展開、平成 18 年文部科学省現代的教育ニーズ採択事業で共通教育に環境 ESD 指導者養成カリキュラムを開講、平成 24 年文部科学省大学の世界展開力強化採択事業で共通教育に SUIJI サーバントリーダー養成カリキュラムを開講。

■プログラム概要

「聞いたことは忘れる、見たことは思い出す、体験したことは理解する、発見したことは身につく」3000 年ほど前に古代中国思想家が説いたされる学問についての教えは、私達自らの学びをふり返ったときにも納得をもって共感できると思います。ところが、大学に入るまでそして大学に入ってからも、学びの形は「聞く」ことを中心に展開されるのが多いのが実情です。現在、着目されているアクティブ・ラーニングは、聞くだけでは身につかない学びを、身につく学びへと転換することにつながる授業の形態です。

この研修では、私がこれまでに学内外で実践してきた森林環境教育やサービスラーニングの事例を紹介し、経験の少ない学生がグループワークやフィールドワークを通じてどのような学びを得ているかについて、学生の成果物から参加者のみなさんと共に読み取ります。

また、参加者のみなさんには、学生が経験から得た学びを社会の持続的発展に貢献する行動する姿勢を促す授業活動について、考案してその成果を共有します。

■主な受講対象

本研修は、「経験」を基調とする授業を展開しながら学生が主体的に授業に関わる姿勢を引き出したい方や、サービスラーニングなどに代表される学生教育と社会貢献を兼ねる授業を実施することを模索している方々に特におすすめします。

また、2016 年から 2030 年までに世界が達成すべき目標である国連「持続可能な開発目標」を講義内容に反映することに興味のある方にも向いています。

■本プログラムの到達目標

1. 学びにつながる経験の事例を具体的に説明できる。
2. 経験を重視した授業に参加した学生の成果物から、学生が何を学んだかを説明することができるようになる。
3. 経験することを通じて学んだ学生から社会に貢献する行動を促す授業内容を考案できるようになる。
4. 国連「持続可能な開発目標」を、経験を重視した授業に生かす方法を説明することができる。

■日時・会場

日時：平成28年8月26日（金）13：00～15：00
会場：愛媛大学城北キャンパス